

「学級規模の及ぼす教育効果に関する研究—学習指導班報告書」 の概要について

1. 調査研究の目的・概要

(1) 調査研究の目的

本研究は、学級規模が教師の授業構成や指導方法等に与える影響について検討することを通して、少人数学級の利点を生かした授業や指導の在り方に関する基礎資料を得る。

(2) 調査研究の概要

調査研究は、以下の手順で行った。

【研究期間：平成23～24年度、研究代表者：工藤文三（初等中等教育研究部長）】

① 志木市調査

通常の学級と25名程度の少人数学級の両方を経験した志木市の教員31名を対象に質問紙調査を実施し、「少人数学級実施による学習指導面の効果」等に関する自由記述を分類し、少人数学級の利点を検討する視点を抽出した。

② 授業構成の視点と枠組みの協議

①の志木市調査の結果をもとに指導主事や教員との研究協議を進め、学級規模を生かした効果的な授業構成等の視点と枠組み（指導の工夫のポイント、学習指導案の形式）を検討した。

③ 視点・枠組みに基づく学習指導案事例の開発

②の視点に基づいて、学習指導案の形式を検討した上で、教科等（国語科、社会科、算数科、理科、体育科、総合的な学習の時間）の学習指導案事例を指導主事と教員が各々開発した。

④ 授業の実施・事後協議・分析

開発した教科等の学習指導案をもとに教員が授業を実施した後、授業の事後協議を行った。事前の指導案記述、実際の授業ビデオ、事後の振り返り発話をデータとして、少人数学級が可能にする授業構成と指導方法等を分析した。

2. 研究成果の概要

(1) 学級規模を生かした授業構成の視点と学習指導案の形式

志木市調査で得られた知見をもとに、効果的な授業構成の視点のたたき台を示し、研究協議を進めた結果、以下の5つの視点が抽出された。

- ①主体的活動（a. 探究、b. 体験、c. 表現、d. 言語活動、e. ICTの活用）—*単元構成への反映*
- ②スペースの活用と教材・教具（a. 学習形態の工夫、b. 教材・教具の活用、c. 学習コーナーの設置、d. 作品の掲示の工夫）—*空間*
- ③学習への参加（a. 発言や発表、b. 練習の回数や時間、c. 個別学習や相互交流）—*時間・機会*
- ④個別の指導（a. 個に応じた教材の準備、b. 机間指導、c. 声かけ、d. ノート指導、e. スキルの指導と定着、f. 特別なニーズへの配慮、g. 安全面への対応）—*指導*
- ⑤きめ細かな評価（a. 学習状況の把握、b. ノート・学習カード・評価カードなどの点検、c. 授業前中後の記録と評価）—*評価*

学習指導案の形式は、「学級規模を生かした効果的な指導のポイント」を一つ選んで単元名の副題に付し、通常の単元目標や指導計画、本時の目標・構想・展開に加えて、上記の各視点について、具体的に「工夫した指導のポイント」を記述させるものとした。

(2) 授業の実施と分析

学習指導案と授業の主要な分析結果は、次のとおりである。

① 指導主事の「指導の工夫のポイント」の分析

4名の指導主事の各々異なる4教科等（国語、算数、体育、総合）の「指導の工夫のポイント」を分析したところ、「一人ひとりの学びへの注目」、「授業中の形成的評価」、「学習目標に対する授業の進捗管理」の重要性は共通に言及された。その一方で、「一人ひとり」の興味関心の違いを活用し相互作用させることで学びを深めるのか（多様性モデル）、成績や能力の違いを見極めて指導やヒントを与えて正解に導くのか（正解収束モデル）など、少人数学級を生かした授業構成について異なるモデルの存在が同定できた。

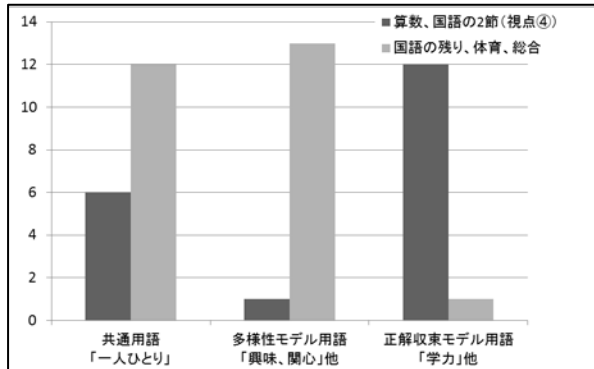


図. 指導主事の記述における表現（のべ頻度）

左図に見るとおり、どの科目でも「一人ひとり」という記述は見られるが、国語、体育、総合の指導の工夫において、児童の「興味」や「関心」、「意欲」、「多様」といった多様性モデルを示唆する用語の記述数が多く、算数および低学力層の児童に関する国語において、「学力」や「習熟」、「進歩」、「差」、「苦手」といった正解収束モデルを示唆する用語の記述数が多かった。

② 教員の指導案の分析

授業を行う6名の教員の指導案を分析したところ、教員は多様性モデルに言及しやすく、児童の『多様性』を取り込んだ授業を少人数学級において構想できることが示唆された。どの授業でも一人ひとりの考えを表す「外化ツール（付箋、ワークシート他）」（（1）の視点②）や話し合いの機会（視点③）が設定され、学習者の主体的な活動（視点①）と指導と評価を一体化させる（視点④⑤）といった視点間の連携が図られていた。ただし、算数では、指導主事同様の正解収束モデルが教員から表明されるなど、科目の影響も垣間見えた。

③ 授業の分析

授業の見学およびビデオ分析を通して、6授業においてグループ活動が取り入れられていたか否か、その場合の人数とグループ数、席替えの有無、個人・グループ・クラス・個人での考えの表明や共有をいかなるツールで行ったかを表にまとめた。

学年・科目	4年・国語	3年・社会	4年・算数	4年・理科	4年・体育	3年・総合
児童数	30名	31名	27名	32名	26名	33名
グループ活動	✓	✓	△	×	✓	✓
グループ人数 ×グループ数	2-4名 ×8班	3-4名 ×10班	4名 ×4班まで	—	4-5名 ×6班	4名 ×8班
席替え	✓	×	△	×	×	✓
個人の考え・解法の外化手段	付箋、クリアフォルダ	付箋	ワークシート	ノート、持参物	ワークシート	付箋
グループでの共有の手段	ホワイトボード、付箋つきホワイトボード、イーゼル	色画用紙	—	—	ホワイトボード	ホワイトボード
クラスでの共有の手段	口頭	黒板	口頭か黒板前演示	モニター、A0用紙	発表	黒板
個人のまとめの手段	クリアフォルダ	ノート	ノート	ノート	ワークシート	×

（注）表中の✓は全員に認められるもの、△は一部児童のみ認められるもの、×は明確に認められないものを意味する。

表から、以下の結果が示された。

- ・ グループ活動など言語活動が6分の4クラスで導入された。加えて、グループ人数も、機械的な人数割りではなく、子どもの興味・関心に従った不揃いな人数でのグループングが許された。学級全体でのグループ数は10班以内に収まった。
- ・ 準備の程度で違いが見られるものの、全クラスで児童の考えの表明や交換、最後のまとめを支援するツールが工夫されていた。

④ 授業の詳細と協議会分析

上記の授業の形式的な分析に加え、教歴の短い教員が行った算数と体育については、授業内容と事後協議会の詳細な質的分析を行った。その結果、算数では、複合図形の求積問題を対象に、各児童の課題解決の進捗状況を示すために黒板上でマグネットが使われたが、事後協議会では、さまざまな求積方法のどれを各児童が選んだかという多様性を示すために使い得たことが指摘された。体育では、ハンドボールを対象に、複数の教員による事前の授業の形成的評価から、コートオリジナルの3分の2のサイズにするなど、児童の能力や一人ひとりの違いに合わせた指導改善がなされたことがわかった。以上より、上記の形式的な分析では見えないようなツールの使い方の意味や形成的評価の意義が明らかになった。

(3) まとめと今後の課題

提案した5つの視点に基づいて授業案や授業を分析した結果から、次の示唆を得た。

- ・ 学級規模の小ささを授業の成功に結び付けるためには、少人数学級の利点を生かした授業構成や指導方法等の工夫改善が重要であり、両者があいまって初めて、学力向上等の効果につながる可能性がある。教師の授業観（指導モデル）に従って、きわめて多様な指導方法が採られ、それが学習者の学力やその発達的な変化に影響を与え得るからである。
- ・ 児童の興味関心を大切に、主体的な活動をもとに学習を深めさせる「多様性モデル」は、授業の一つの理想型であるが、少人数学級においては、効果的な指導の工夫の観点（①～⑤）を関連させ取り込みながら、こうした授業を構想することが可能になることが示唆された。
- ・ 少人数学級では、形成的評価が行いやすく、特に複数教員の重層的な視点で評価できると、授業中や授業間の指導の改善工夫が行いやすくなる。これは、授業のデザイン研究（理論に基づく授業案の計画－実施－改善－理論修正）につながる。

今後の課題として、①教師の指導モデルの洗い出しとその診断方法の精緻化、②大人数学級との比較も含めた大規模データでの検証（モデルと対応づけた授業場面の記録、分析）が求められる。